

問題提起

田中秀夫

社会思想史学会の2015年10月の大会のセッションFで、われわれは「近代国家と戦争——啓蒙思想家はどう考えたか——」という主題を取り上げ、3報告と討論を行った。まず、世話人の問題提起を引用しておこう。

21世紀は平和と繁栄が期待されたが、近年、イスラム系の諸集団によってイスラム地域で国家との内戦が展開されているだけでなく、ヨーロッパなどでもテロが頻発する事態となっていて、国際情勢が不穏になっている。南沙諸島での領土争いをみると、中国の帝国化も心配である。日本の集団的自衛権論議も問題をはらんでいる。

各種の戦争が喫緊の課題として再検討されねばならなくなっている。1914年から100年を経て、第一次戦争研究が盛んになっているのも、現代の不穏な動きと関連があると思われる。そうした動向は啓蒙研究にも影響を与えずにはすまないであろう。

30年戦争以後のウェストファリア体制（勢力均衡ないし限定戦争体制）のもとで啓蒙思想家は戦争と平和の問題をどう考えたのかを改めて再検討する必要があるのではないか。このセッションはそのような問題意識で今回、文明社会と戦争の問題に迫ろうと考えた。

長く待望されていたサン・ピエールの『永久平和論』の邦訳もようやく刊行された。グロティウスの『戦争と平和の法』も新訳が企画されている。それにカントの『永遠平和論』を加えると啓蒙のキャンオンが揃うわけであるが、これらは経済の次元が弱い。そうしたキャンオンの議論を補うものがイギリス（大ブリテン）にあるのではないか。

一度には多くを対象にはできないので、今回はロックを中心に17世紀の思想家の戦争観、そして18世紀の啓蒙思想を代表する2人、バークとスミスの見解を俎上に乗せようと考えた。自然法論に立つロックとシヴィック・ヒューマニズムを基調とするフレッチャーを対比することで17世紀末の議論の特徴に迫る生越報告、バークのユニークな歴史観に迫る佐藤報告、そしてヒュームと共に18世紀の大ブリテンにおいて戦争と平和の問題を考える思想的手段を豊富に用意してくれたアダム・スミスに則して考察する渡辺報告、このトライアングルからいくつもの興味深い可能性が出て来ると期待される。

戦争の廃絶は人類が成功できていない課題である。しかし、その廃絶の可能性への手がかりは、案外、啓蒙思想家の武器庫に存在しているのではないかと予想される。期待が裏付けられるか、裏切られるか、2人のベテランと新進気鋭のバーク研究者にきいてみたい。

以上の問題提起を受けて、3報告が行われた。今回の特集では、田中の「ヒュームの文明社会論における戦争」という論考を追加して、4論文を掲載することにした。論文の順番は考察対象となった思想家の年代順にしてある。最後に「今後の研究のために」と題して、セッションの世話人とし

ての一種の「あとがき」を添えることにしたが、それは全体の総括というものでは必ずしもなく、「個人的なとりまとめ」という色彩のものである。